



図 4 「郷原漆器の館」の製作工房を見学する参加者。

業や技術の存続が危ぶまれる状況にある現在、岡山県における官と民が協力した文化保存の在り方は、久しぶりに聞いた明るい話題だった。また、ウルシというひとつの植物をめぐる、考古学、植物学、漆芸など異なる専門を持つ人々が集まったということは、今後の漆研究の多角的な可能性を物語っている。

今回の談話会は漆に魅せられた人々が心身ともに、心ゆくまで漆にかぶれた 2 日間だった。

最後に、お忙しい中案内してくださった高山氏、小野氏、山口氏、そしてこの談話会を企画してくださった世話人の能城修一氏、扇崎 由氏、守田益宗氏に深く感謝申し上げます。

(¹ 〒 162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学考古学研究室)

田中孝尚¹：報告—第 27 回日本植生史学会談話会

Takahisa Tanaka¹: Report—The 27th forum of the Japanese Association of Historical Botany

第 27 回日本植生史学会談話会が 2008 年 8 月 2 日～3 日にわたり岡山県備中町、新見市、恵庭市で行われた。今回の談話会「漆にかぶれよう」に参加したのは、備中漆の里を訪れて、実際に漆液の採集を体験し、かぶれることをも含めてウルシへの理解を深めたいとの気持ちからである。談話会の参加人数は、一般参加者、世話人、案内人の合計 13 人であり、社団法人林原共済会「漆の館」指導員の小野忠司氏に備中漆の里を案内して頂き、備中を代表する郷原漆器の見学を行った。

備中は、古くからの漆液の生産地であったが、近年になり漆掻きが生業として成り立たなくなり伝統技術の継承が危ぶまれる状況であった。そこで、社団法人林原共済会と岡山県郷土文化財団が協力して「備中漆復活振興事業」を興し、ウルシの植栽と管理、そして漆掻き後継者の育成が行われている。郷原漆器(真庭市蒜山)は、明徳年間(1390～1394 年)頃よりはじまったが、戦後になり後継者不足から生産が途絶えていた。しかし、昭和 60 年から岡山県郷土文化財団によって郷原漆器の復活が行われ、現在では「郷原漆器の館」を中心に漆器製作と普及、後継者の育成が行われている。

8 月 2 日午前 8 時 50 分に岡山駅に集合し、最初の目的地である岡山県高梁市備中町西油野のウルシ植栽地に向かった。バスの中で世話人の能城修一氏(森林総合研究所)より談話会の概略について簡単な説明があり、備中町に着くまでの間、高山隆之氏(岡山県郷土文化財団)から郷原漆器の復興事業についてお話を伺った。目的地手前で小野氏と合流し、備中湖畔の道を通ってウルシ植栽地に向かった。湖畔には所々に放棄されたウルシの木が見えたが、民

家はほとんど見られなかった。ウルシ植栽地も湖畔の急斜面にあり、小野氏が師事され、長年漆掻きをされていた丹下民雄氏の自宅があった場所とのことであった(図 1)。現在は住む人もなく残されたウルシに時折漆掻きが行われて

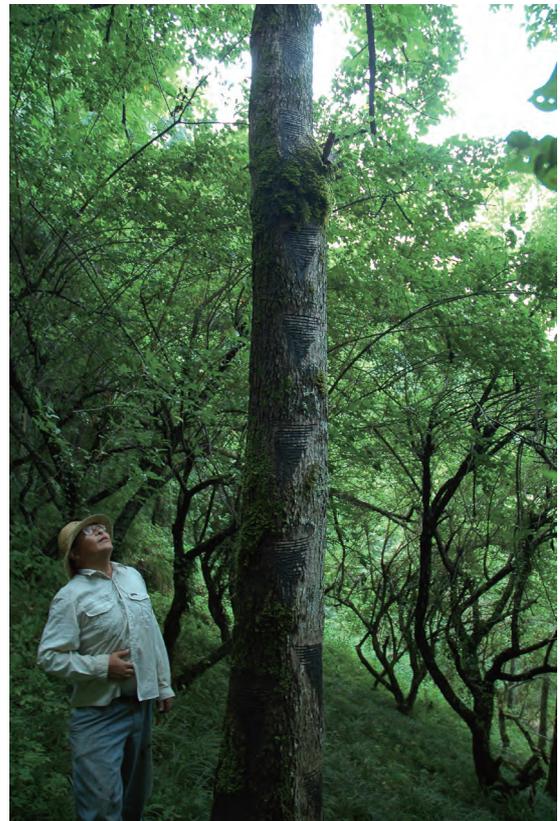


図 1 丹下民雄氏のウルシ畑で説明する小野忠司氏。

いる状況であった。備中湖は、昭和43年に完成した新成羽川ダムによってできた人造湖である。もともと同地区一帯は、備中漆の産地であったが、ダム建設によって多くのウルシの木と住居が水没し、それを機に多くの漆掻き職人が生業をすてて離れて行ったとのことであった。丹下氏は、漆掻きを続けるために現在の湖畔に居を移したとのことだった。ここで、本談話会で初めてウルシを目にすることができた。一番大きなウルシは小野氏のお話では約30年生であり、直径40 cmであった。木の根元から約4 mの高さまでウルシが掻かれており、参加者も皆驚いた。ここでは13辺までの養生掻きが行われていた。

ついで岡山県新見市法曹にある林原共済会の備中漆新見研修所「漆の館」に移動した。この「漆の館」は、ウルシ掻き技術の習得とウルシの植栽のために日本各地から苗を取り寄せて育てている。ここでは小野氏から非常に興味深いお話を伺った。今まで、幾人かの方からウルシの産地によって漆液の質が異なるとの話を伺っていたが、今回初めて自分自身で漆液の品質に差異があることを認識した。漆液の品質には、個体間や生育環境だけではなく、掻き手の違いでも差異が生じるという。小野氏に、蒜山のウルシ植栽地で育てた、産地と樹齢の異なる漆液の瓶詰めを見せて頂いた。これらを見比べると、明確に幾つかの液層に分離しているものから、液層の境界がやや不明瞭なもの、全く分離しておらず単一の液層からなるものが認められた(図2)。岡山県で育てたウルシの中では、備中漆は分離しやすく、岩手県浄法寺産の漆は分離しにくく、樹齢のいったウルシの漆液は分離しやすいとのことであった。一般的には、備中漆は乾きにくく、浄法寺産は乾きやすいと言われており、こうした質の違いを反映しているのではないかと思われる。現在、樺蠟を採るハゼノキをはじめ、多くの栽培植物では、長い栽培の歴史や育種によって栽培品種が成立しているが、ウルシには不思議と品種がない。優良な個体

は、育成者によって、質の良い木や量の採れる木といったように認識されているとのことであった。しかし一般的には、漆液は産地名で評価されている。

昼食後、縄文時代の漆掻き跡をまねて、ウルシ畑で扇崎由氏(岡山市教育委員会)が持ってこられた讃岐のカンカン石(サヌカイト)の石刃を用いて、実際にウルシを掻く実験を行った。実験を行う前には、石刃ではウルシの樹皮を掻く(切る)ことは無理なのではないかとの意見もあったが、行ってみると意外にウルシの樹皮を切ることができ、見事に予想を裏切る結果となった。

午後3時には蒜山高原の岡山理科大学蒜山学舎に向けて出発し、午後5時前に到着した。その後、夕食の前にウルシについての勉強会を行った。はじめに漆芸家の山口松太氏(岡山県指定重要無形文化財保持者)から漆塗りの乾燥方法に合った漆液の品質について話を伺った。備中漆は乾きにくい、漆器を彩る加飾を行うには、この備中漆がとても使いやすいとお話だった。次に、佐々木由香氏((株)パレオ・ラボ)から2002年になって遺跡出土植物遺体の構造からウルシの種を同定することが可能になり、多くの遺跡からウルシの植物遺体が見出されていることについてお話を伺った。ここで一旦、夕食となり、大盛りのジンギスカン鍋と地元の豆腐を頂いた。夕食後、勉強会の続きが行われ、私が日本、韓国、中国の栽培するウルシと中国の野生ウルシの、葉緑体DNAから見た遺伝的關係について話をした。そして、美味しいお酒と岡山の桃を頂きつつ、漆談義が果てしなく続いて夜が更けていった。

8月3日は9時に蒜山高原にある林原共済会のウルシ植栽地に向けて出発した。ここには、小野氏のお話では、岩手県浄法寺や茨城県大子をはじめとする様々な産地のウルシ400本弱を植栽しているとのことであった。植栽当初は、生育不良をおこしていたが、肥料を土壌に加えたりして土壌改良にも努め、現在では良い生育が期待できるよう



図2 岡山県で採取された漆液の分離。



図3 ウルシ植栽地で漆の掻き方について説明を聞く参加者。



図 4 漆掻きによって、掻き溝から染み出てくる漆液。



図 5 「郷原漆器の館」で塗りの工程を見学する参加者。



図 6 日本植生史学会談話会参加者（郷原漆器の館にて）。

になったとのことであった。概略の説明の後、特異な形の漆掻き用具を用いて漆掻きを実演して頂いた（図 3）。その手順は、1:「皮剥き鎌」でウルシの木の樹皮を剥いて整える、2:「漆鉋^{うるしかんな}」で溝を作り、アヤ（漆鉋の小刀部）で二次師部にある漆液溝を切る、3:「掻き篋^{かきべら}」を使って染み出た漆液（図 4）を集める、である。また、初日は石刃で若木の枝と幹の漆掻きを試したが、ここではもう少し大きなウルシ（直径 15 cm）で試みたところ、よく切ることができ石刃もなかなか鋭利だと感心させられた。そして、小野氏が樹液の味見をするのを見て、何人かが舐めてみた。以前から私は、最初に出てくる透明な樹液は甘いと思っていたので試してみたところ、樹皮を押ししまい乳白色の漆液も舐めてしまった。味は、少しピリッとした水性絵の具のようであった。しばらくして舌を見たら少し黒く漆塗りになっていた。

その後、真庭市の「郷原漆器の館」で郷原漆器の見学を行った。現在の郷原漆器は、野生のクリの生木の材から生地を作り、数ヶ月間乾燥させて塗りを行い、木目を生かした器を伝統の製法で作られているとのことであった（図 5）。そして、小野氏と別れ、近くの道の駅で一息入れて、岡山駅に移動後、午後 4 時に解散した。

ウルシは、少なくとも縄文時代より現在まで用いられてきた。ウルシや漆器は、もともと身近な存在だったはずなのに知らないことが多いことを痛感した。今回、漆掻きを間近に観察し体験できたことにより、ウルシを知識としてではなく経験として少しでも捉えることができた。最後に今回の談話会を、計画、準備して頂きました能城修一氏、扇崎由氏、守田益宗氏、また、ご案内頂きました小野忠司氏、山口松太氏、高山隆之氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

丹下民雄. 1999. 備中漆掻き. 121 pp. 社団法人林原共済会, 岡山市.
(〒 980-0862 仙台市青葉区川内 12-2 東北大学植物園)